

<b>Title</b>	古代日本語における動詞移動
<b>Author(s)</b>	小林, 茂之
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,20(2) : 139-154
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=37">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=37</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 古代日本語における動詞移動

小林茂之

Verb Movement in Old Japanese

Shigeyuki KOBAYASHI

Verb Movement is assumed in many languages and in diachronic syntax. Japanese does not show overt verb movement in terms of word order, but it is also assumed to have covert verb movement in terms of interpretation of tense. However, the author will point out that Old Japanese did not have such verb movement in some phenomena.

---

**Key words:** Verb Movement, Old Japanese, Diachronic Syntax, Modality, Tense

## 0 はじめに

言語の統語的变化を扱う分野は、通時統語論 (diachronic syntax) と呼ばれている。通時的变化におけるある時点と他の時点における違いの中には、比較統語論で使われる P & P 理論におけるパラメータを使って記述できる変化がある。本稿では、諸言語に見られる動詞移動を取り上げ、通時の変化も同様にとらえることができることをみる。そして、日本語においても仮定されている動詞変化は、古代語においてパラメータによる変化として捉えられる現象を指摘する。

通時論は、言語の変化を分析することを目的とする以上、その原因や過程を詳細に論じることは重要である。しかし、現状では統語論において言語の離散的性質が仮定されているとあってよいだろう。この点で、本稿の立場は、言語の年代的に離れた時点における相違、いわば異時点 (intertemporal) な変化を記述するものである。共時論から完全に独立して「変化を記述する方法論は、連続性を扱うという困難な面を避けることはできない。その意味で、本稿は、変化そのものを分析する前提、どのような変化があったかを確定することを目指すものである。

## 1 動詞移動

動詞移動は、主要部移動 (head movement) として、副詞が動詞に先行し、副詞が動詞と目的語

の間に介在できない言語, すなわち英語のような言語と, フランス語のような言語との違いを説明するパラメータとして仮定されてきた。本節では, 諸言語において, 動詞移動を仮定する必要をみることにする。以下の第1節と第2節の議論とデータは, Roberts2007: 41-59による。

### 1.1 T への動詞移動 (V-to-T Movement)

現在の統語論の枠組みでは, 英語における動詞と目的語の隣接性が厳密であること, すなわち, 動詞と目的語との間に副詞などの要素が介在することが禁止されていることは, 動詞句 (VP) が, 動詞と目的語が併合 (merge) されることによって形成されることから説明でされる。動詞と目的語とが併合されて動詞句が形成されるので, 動詞と目的語は隣接するのである。(1)は英語の例である。

- (1) a. \*John kisses often Mary.  
       John often kisses Mary.  
       b. \*John eats not chocolate.  
       John does not eat chocolate.

これに対して, フランス語の (2a) では副詞 *souvent* が動詞と目的語の間に介在している。また, (2b) では否定辞 *pas* が動詞と目的語の間に介在している。

- (2) a. Jean embrasse souvent Marie. ((1a) に対応)  
       \*Jean souvent embrasse Marie.  
       b. Jean (ne) mange pas de chocolat. ((1b) に対応)  
       \*Jean (ne) pas merge de chocolat.

このような場合, 動詞と目的語との併合を仮定するかどうか問題になる。

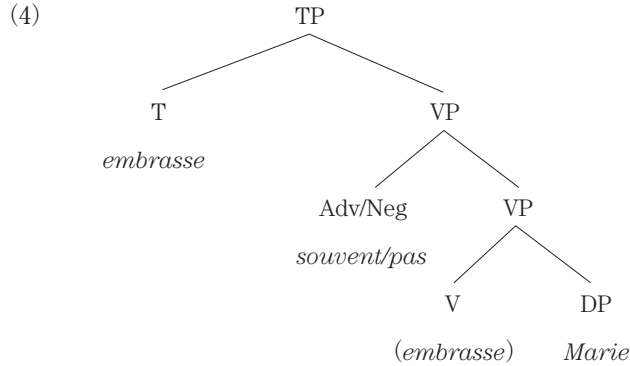
ところで, 英語では助動詞 (auxiliary) が時制を荷っている。(3)のように, 英語では, 助動詞 *has* が, 副詞や否定辞に先行する。

- (3) a. John has often kissed Mary.  
       b. John has not kissed Mary.

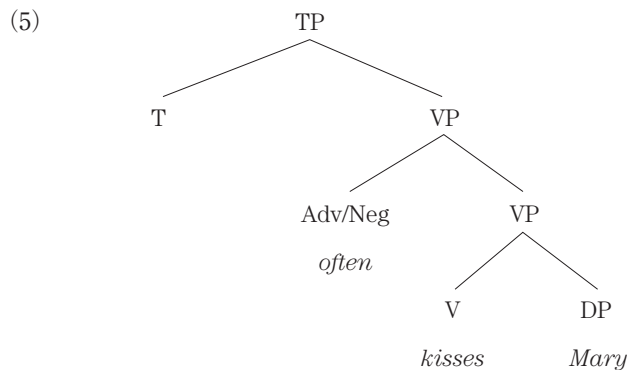
(3)の *has* は (1b) の助動詞 *does* と同じ場所を占めることから, (i) *do* は時制/一致標識 (tense/agreement marker) の助動詞であること (ii) 助動詞が担う時制要素は, 副詞や否定辞の左側, つまり VP 外に位置することが示される。

古代日本語における動詞移動

定形動詞は時制位置にあると考えられるので、フランス語の定形動詞はVP内から時制要素の位置Tに移動すると分析される。フランス語(2a)の統語構造は次のようになる。



先の英語(1a)の(文法的な)構造は次のようになる。



フランス語の構造(4)と対応する英語の構造(5)とを比較すると、定形主動詞 (finite main verb) の位置が異なっている。こうして、フランス語では、定形主動詞がTに移動すると分析されるのである。したがって、(2a) (2b) のようにフランス語では、動詞と目的語との間に副詞や否定辞が介在するけれども、これは動詞のTへの移動の結果とみなされる。

このような動詞のT位置への移動は、V-to-T移動と呼ばれる。これは、諸言語の間の違いを示すパラメータの一つである。

(6) Vは定形節のTに移動するか？

YES : フランス語, ウェールズ語 (Welsh), イタリア語, アイスランド語, ギリシア語...

NO : 英語, スウェーデン語 (Swedish), デンマーク語 (Danish), ...

重要な点は、英語とフランス語のような言語間の語順の違いが動詞移動を仮定することによって説明されることである。

## 1.2 C への動詞移動 (V-to-C Movement)

次に、動詞がC位置まで移動することをみることにする。これは、V2と呼ばれる現象と関係する。V2 (verb second) 言語とは、定形動詞 (finite verb) が、句が何であれ、その直後にくる言語である。ドイツ語 (German) はV2言語の例として最も知られている。(7)はドイツ語の例である。

- (7) a. Ich **las** schon letztes Jahr diesen Roman.  
I read already last year this novel
- b. Diesen Roman **las** ich schon letztes Jahr.  
this novel read I already last year
- c. Schon letztes Jahr **las** ich diesen Roman.  
already last year read I this novel
- d. \*Schon letztes Jahr ich **las** diesen Roman.  
already last year I read this novel

(7d)は一つ以上の句XPが重なってはならないことをあらわす。すなわち、(7c)では、“Schon letztes Jahr”は一つの構成素を成しているのに対して、(7d)では、“Schon letztes Jahr ich **las**”は一つの構成素を成しえない。

(7d)に対応するV2言語でない英語、フランス語の例は次のようになる。

- (8) a. Last year I read this novel.
- b. L'an dernier j'al lu ce roman.

英語やフランス語は、V2言語ではないので、ドイツ語(8d)に対応する(9a)(9b)は文法的なのである。V2言語であるドイツ語(8)は、(i)(8a)、(8c)では、動詞は目的語から分離してVP外に移動していること、(ii)(8b)では、目的語がV2節の第一位置のXPまで移動しているので、主題化(topicalization)であることを示している。

(8)に対して、周辺的なテンスでは、助動詞が二番目の位置にくる。

- (9) a. Ich **habe** schon letztes Jahr diesen Roman **gelesen**.  
have already last year this novel read

古代日本語における動詞移動

b. Diesen Roman **habe** ich schon letztes Jahr **gelesen**.

this novel have I already last year read

c. Schon letztes Jahr **habe** ich diesen Roman **gelesen**.

already last year have I this novel read

'I have read this novel last year already.'

(9)の場合、助動詞が時制を荷っている。その場合、非定形動詞 (non-finite verb) は目的語に後続する。したがって、定形主動詞や助動詞が時制を担うことから、V2がT位置への移動を含んでいることが分かる。問題は、ちょうどT位置か、もっと上位の位置への移動なのか、ということである。

V2は、多くの言語では主節 (main clause) に限定されている。たとえば、ドイツ語では、埋め込み節 (embedded clause) の定形動詞や助動詞は最後の位置にくる。

(10) Du weißt wohl,

You know well

a. … daß ich schon letztes Jahr diesen Roman **las**.

… that I already last year this novel read

b. … daß ich schon letztes Jahr diesen Roman **gelesen habe**.

… that I already last year this book read have

(11) Ich frage mich,

I ask myself

a. … ob ich schon letztes Jahr diesen Roman **las**.

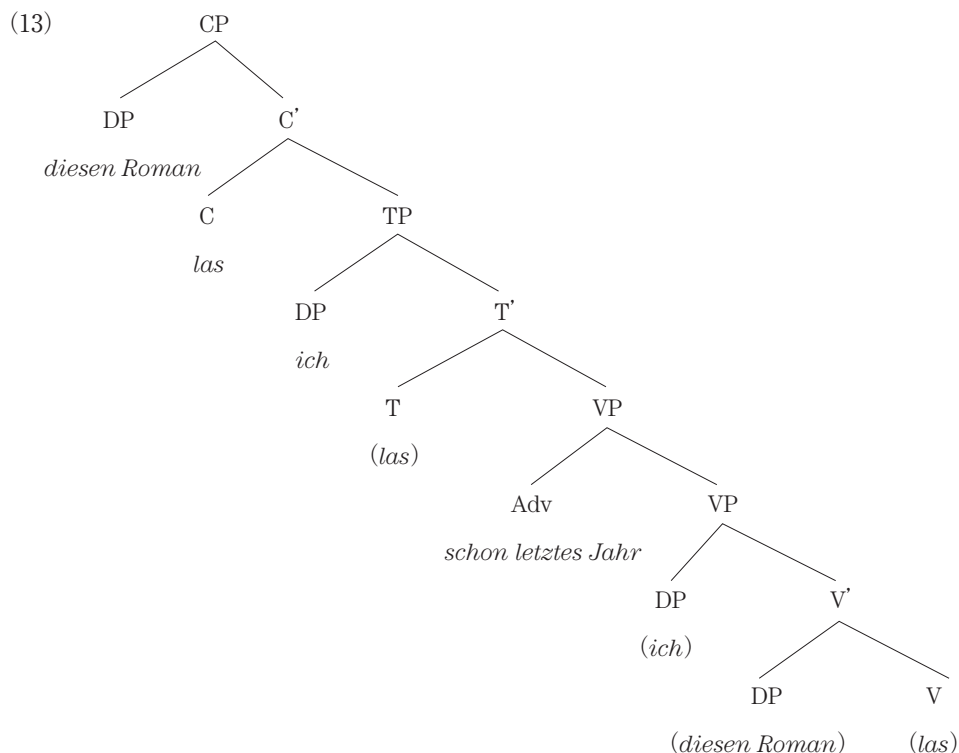
… if I already last year this novel read

b. … ob ich schon letztes Jahr diesen Roman **gelesen habe**.

… if I already last year this book read have

埋め込み節は、典型的には補文化子 (complementizer) によって導入される。ドイツ語の daß や ob は補文化子であり、その範疇 (category) をCとする。CはTPと併合されて、埋め込み節CPを形成する。

(12) [<sub>CP</sub> ob/daß [<sub>TP</sub> ich schon letztes Jahr diesen Roman las]]



V2では動詞はC位置に移動するとすると、埋め込み節では既にCは補文化子によって占められているので、動詞は移動できないことになる。(7b)の構造は(13)のようになる。

以上のようなV-to-C移動に関して、次のパラメータを設定 (postulate) することができる。

(14) 定形動詞が定形主節のCに移動するか？

YES : ドイツ語, オランダ語, スエーデン語, アイスランド語, カシミール語 (Kashmiri),  
 ロマンシュ語 (Romansh)...

NO : 英語, フランス語, イタリア語, ウェールズ語...

このパラメータに関して陰性である英語やフランス語は、助動詞がC位置を占める構文がある。これらは完全に陰性 (negative) なのではなく、「残余的V2」(‘residualV2’) 言語である。

(15) a. How many books have you read?

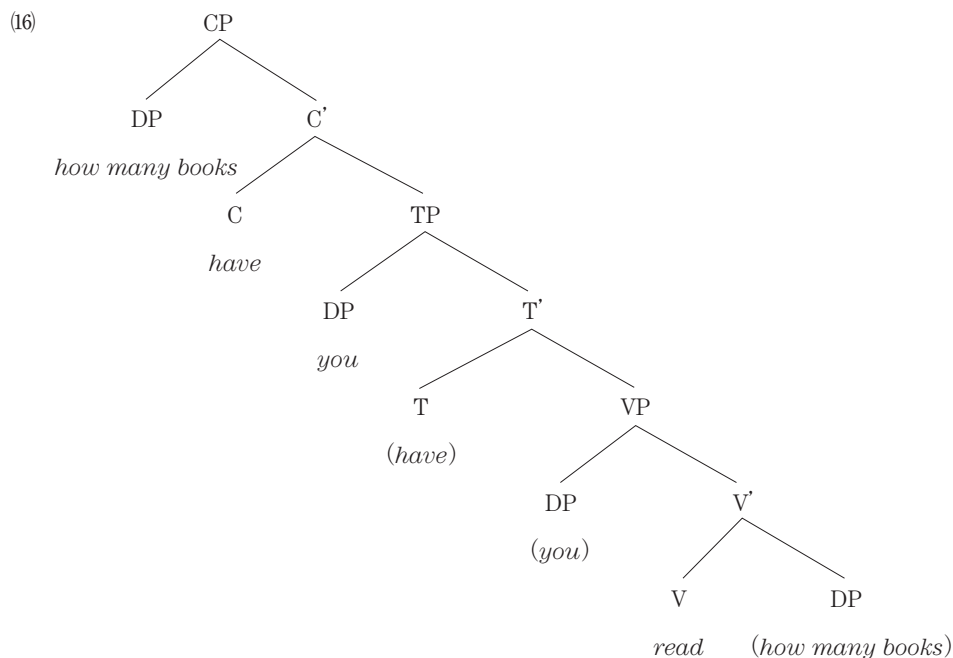
b. Combien de livres as-tu lus?

(15)では、助動詞 *have/as* が主語より前にある。また、助動詞はT要素であり、英語やフラン

古代日本語における動詞移動

英語では主語は SpecT に位置するので、(15)の助動詞 *have/as* はより高い位置である C に移動していると考えられる。したがって、(15a) の構造は(16)のようになる。

補文化子が現れる間接疑問文では、この語順は許されないという事実から、助動詞が C に移動するという仮説は検証される。補文化子が既に C の位置を占めているからである。



- (17) a. \*I wonder if has he read that book.  
b. \*Je me demande si a-t-il lu ce livre.

フランス語の主節の疑問文では、主動詞が C に移動できるのに対して、英語ではこの可能性は助動詞に限られる。

- (18) a. Quel genre de livre préfères-tu lire en vacances?  
b. \*What kind of book prefer you read on holiday?

英語では、(18b) の代わりに、(19)のように助動詞 *do* が使われる。

- (19) What kind of book do you prefer to read on holiday?



英語では、助動詞だけがV2節のCに移動できることは、V-to-T移動のパラメータと次の主部移動 (head-movement) に課せられた制約 (constraint) から説明される。

(20) 主部移動制約 (The Head Movement Constraint) :

1回の移動 (a single step of movement) では、主部は次の上の主部まで移動することができる。

既に見たように、英語では、動詞はVP内からTまで移動できないので、そこからさらにCまで移動することはできない。しかし、助動詞はTに併合 (Merge) されて初めからT位置を占めるので、そこからCに移動できる。他方、フランス語では、動詞はVP内からTまで移動できるので、Tを経由してCに移動できる。

以上のように、動詞移動にはV-to-T移動とV-to-C移動があり、それらとそれらに課せられる主部移動制約とによって、諸言語にみられる主語、動詞、副詞などの語順の多様性を記述することができるのである。

## 2 動詞移動パラメータ (Verb-movement parameters) の通時的様相

通時的な言語変化においても、前節でみた諸言語におけるV-to-TおよびV-to-Cパラメータによる変化がある。言語的な多様性を記述するという範囲に限れば、通時統語論は、基本的な方法論において共時的な比較統語論と区別される必要はない。

### 2.1 英語のV-to-C移動

英語は、1600年ごろまで主動詞がTに移動することができた。

(21) a. if I gave not this accompt to you

‘if I didn’t give this account to you’

(1557:J.Cheke (イングランドの古典学者), Letter to Hoby)

b. The turkes ... **made anineredy** a grete ordonnauunce.

‘the Turks ... soon prepared a great ordnance.’

(c1482:Kaye, *The Delectable Newsse of the Glorious Victorye of the Rhodyans agaynest the Turkes*)

シェイクスピア (Shakespeare, 1564 ~ 1616) の英語ではTへのV移動は可能だった。シェイクスピアの劇や詩には、(21)のような例が見出せる。(21)から、16世紀の英語はV-to-T移動に関

してフランス語と同じであったとすると、主動詞が残余的 V2 構造の C 位置に移動できたはずである。この予想は、(22) のような例で裏付けられる。

- (22) What menythe this pryste?  
 what does this priest mean  
 (1466-7:Anon. 著者不明)

したがって、この時点までは英語は、V-to-C パラメータに関して正であったのである。

## 2.2 通時論における V2

15世紀までは英語は V-to-C 移動のパラメータに関して正であった。次は古英語の例である。

- (23) a . Se Hæland wearð þa gelomlice ætiwed his leorning-cnihtum.  
 the Lord was then frequently shown his disiples  
 ‘The Lord then frequently appeared to his disiples.’  
 (*Æ C Hom* I, 15.220.21)
- b . On twam þingum hæfde God þæs mannes sawle gegodod.  
 in two things had God this man’s soul endowed  
 ‘With two things God had this man’s soul.’  
 (*Æ C Hom* I, 1.20.1)
- c . pa astah se Hælend up on ane dune.  
 then rose the Lord up on a mountain  
 ‘Then the Lord went up on the mountain.’  
 (*Æ C Hom* I, 12.182.1)

古英語では、他のゲルマン語と同じく、動詞は、埋め込み文では最後にくる。

- (24) a . … þæt ic þas boc of Ledenum gereorde to Engliscre spæce awende.  
 … that I this book from Latin language to English tongue translate  
 ‘… that I translate this book from the Latin language to the English Tongue’  
 (*AHTh*, I, pret, 6)
- b . … þæt he his stefne up ahof.  
 … that he his voice up raised

‘… that he raised up his voice’

(*Bede* 154, 28)

c. … forþon of Breotone nædran scippe lædde wæron.

… because from Britain adders on ships brought were

‘… because vipers were brought on ships from Britain.’

(*Bede* 30, 1-2)

英語の動詞移動に関する変化は、パラメータの変化として分析できる。すなわち、英語は、中世英語 (ME) では、V 2がなお依然観察される。

(25) a. On þis gær wolde þe king Stephne tæcan Rodbert.  
in this year wanted the king Stephenb seize Robert  
‘During this year King Stephen wanted to seize Robert.’  
(c12; *Chron E* (Plummer) 1140.1)

b. Oþir labur sal þai do.  
other labour shall they do’  
‘They must do other labour’  
(*Ben. Rule (1)* (Lnsu) 33.20)

c. Nu loke euerich man toward himseluen.  
now look every man to himself  
‘Now it’s for every man to look to himself.’  
(c13; Ken. Serm 218.134)

(25a) では、副詞的 (adverbial) PP が定形助動詞に先行 (precede) し、(25b) では直接目的語が定形助動詞に先行し、(25c) では副詞が定形助動詞に先行している。V 2は、V-to-C 移動として分析されることを先に見た。

このように、動詞移動における二つのパラメータ V-to-T, V-to-C に関する変化が、文献上の英語史の中であったことが明らかにされている。

### 3 日本語における動詞移動

日本語は、語順において動詞移動を示す現象がみられない。しかし、三原 (1992) などで、時制やモダリティの解釈から動詞移動が仮定されている<sup>(1)</sup>。ところが、古代日本語においては、解釈上

は動詞移動を仮定する必要がないと考えられる現象がみられる。

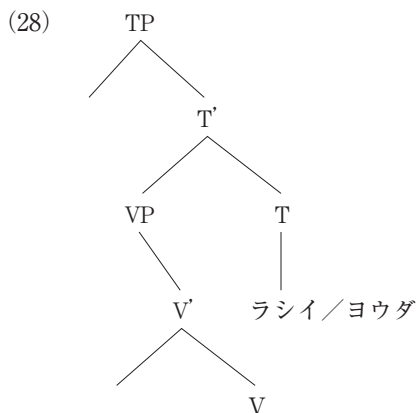
### 3.1 現代日本語

#### 3.1.1 V-to-T 移動

三原 (1992: § 6.4) は、等位構造を基に V-to-T 移動を論じている。

- (26) a. 太郎は清水に行ったらしい, そして花子は大原に行ったらしい。  
 b. 太郎は清水に $\phi$ , そして花子は大原に行ったらしい。  
 c. \*太郎は清水に行った $\phi$ , そして花子は大原に行ったらしい。
- (27) a. 太郎は最小条件について発表するようだ, そして花子は例外的格付与について発表する  
 ようだ。  
 b. 太郎は最小条件について $\phi$ , そして花子は例外的格付与について発表するようだ。  
 c. \*太郎は最小条件について発表する $\phi$ , そして花子は例外的格付与について発表するよ  
 うだ。

もし、V-to-I 移動が起きていないと仮定すると、(26a) (27a) は次の構造であると考えられる。(三原を引用するが、IP は TP に置き替える。ただし、vP は議論に関係ないので省略)



空所化 (26b) (27b) は、等位構造において同一の構成素を削除して得られる構造である。

他方、(28)では、V-T 連鎖「行ったらしい」は構成素を成していないので、これを削除することはできない。したがって、(29)のように、V + ラシイ・ヨウダが V-to-T 移動によって融合されるので、削除できる。

(29) … [T' [VP … e<sub>i</sub>]<sub>T</sub> V<sub>i</sub>-ラシイ / ヨウダ ]

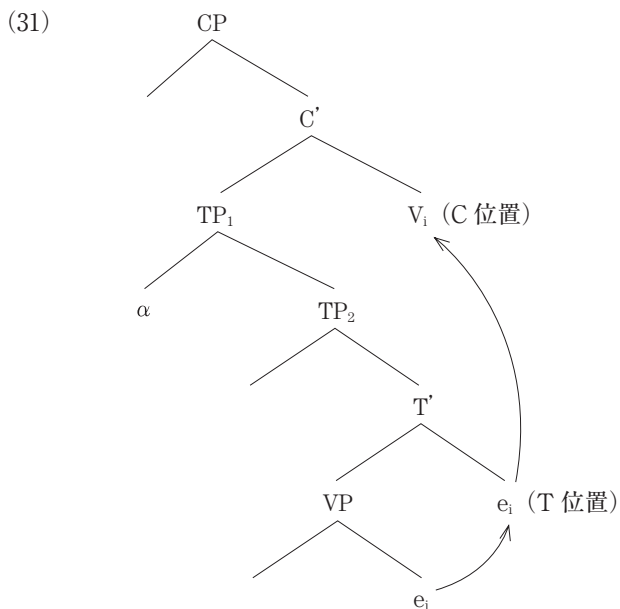
否定「ナイ」が動詞とモダリティ助動詞との間に介在する場合も同様である。「V + モダリティ + ナイ」の連鎖も、「V + モダリティ」連鎖と同様に T 位置に生じる。

- (30) a. 太郎はコンサートに行かなかったそうだ、そして花子は映画に行かなかったそうだ。  
 b. 太郎はコンサートに $\phi$ 、そして花子は映画に行かなかったそうだ。  
 c. \* 太郎はコンサートに行かなかった $\phi$ 、そして花子は映画に行かなかったそうだ。

三原の分析を言い換えれば、日本語では、全ての述語がモダリティ要素と共に T 位置に融合しているということである。

### 3.1.2 V-to-C 移動

三原は、T まで移動した V は更に T 位置から C 位置まで移動すると論じている。



C に終助詞ヨ・ネが含まれる主節、C がトまたは疑問カである従属節では、T-to-C 移動が適用される。

- (32) a. [彼女と別れたことを]<sub>i</sub>, 君はきっと e<sub>i</sub> 後悔するよ。

## 古代日本語における動詞移動

b. 山田君は [[買い込んだ本をすべて]<sub>i</sub>, 引っ越す時に e<sub>i</sub> 売ってしまうのか] と聞いた。

(32ab)の移動した要素は、外側の TP 指定部 ((31)のα) にあると考えられる。三原の分析を言い換えれば、従属節の時制解釈に関して、動詞が C に移動して従属節を C 統御 (C-command) する必要がある。

### 3.2 古代日本語

大野 (1977) によれば、古代語の助動詞配列順序は、次のようになる。

(33) 大野 (1977)

	第一類	第二類	第三類	第四類	別類
助動詞	(す四段)	たまふ四段	つ	ず	なり
	す下二段	たてまつる	ぬ	じ	たり
	さす	きこゆ	り	まじ	ごとし
	しむ	まうす	たり	(ましじ)	まほし
	る	(たまふ下二段)	ざり	む	たし
	らる	はべり	べかり	らむ	
	(ゆ)	さぶらふ	まじかり	けむ	
	(らゆ)		めり	らし	
				まし	
				べし	
			なり		
			き		
			けり		
	活用形完備	活用形完備	活用形やや不備	活用形不備	
	使役・自発・可能・受身・尊敬	尊敬・謙譲・丁寧	完了・持続・確認など	否定・推量・回想	指定・比況・希求

はじめに、時の助動詞と否定との配列順序をあげる。(34)のように、否定は時の助動詞に先行する。

(34) 知らせたてまつりたまはざりけるを (源氏・松風)

(35)のように、時の助動詞はモダリティ助動詞に先行する。(35)では、「ぬ」が「べし」に先行している。

(35) 夜更けはべりぬべし (源氏・桐壺)

また、(36)のように、「たり」は「き」に先行する。

- (36) 賜はせたりしかば (源氏・橋姫)

「き」は(33)の表において、ほぼモダリティ助動詞が属する第四類に含まれている。つまり、テンスがモダリティに先行しているようにみえる。同様に、「ぬ」は、「まし」「む」「べし」に先行する。

- (37) ひきこめられなむは、からかりなまし (源氏・末摘花)  
(38) 親としつべき御手より弾き取り給へらぬは、心ことなりなむかし (源氏・常夏)  
(39) 女官たちのあまた残りとはどまる行く先を思ひやるなん、さらぬ別れにもほだしなりぬべかりける (源氏・若菜上)

このような「ぬ」は「り」や「たり」に後接する。

- (40) この御方々の、すげなくし給はむには、殿のうちには立てりなむや (源氏・常夏)  
(41) かの家にも、隠るへては据ゑたりぬべけれど (源氏・東屋)

大野はモダリティ助動詞の「主観的判断の確からさを強調する」としているが(大野(1977: 103)、テンスとモダリティ動詞との融合が進んだためであるとみえる。また、大野によれば、「つ」(完了)は平安時代にモダリティ助動詞に後接するように変化した。大野によれば、「奈良時代の「動作の決着」をあらわすものから、「話手の確認判断」を表すものへと変化した」としている(大野(1977: 104))。これは、テンス要素のモダリティ化であると解釈される。

反対に、テンス要素がモダリティ助動詞より後に来る例がある。

- (42) かかる姿の人見えざりつ (枕・あはれなりつもの)  
(43) いときなくもの心しろしめすまじかりつるほど (源氏・蜻蛉)  
(44) 大納言の君、小宰相の君にもものたまはんとにこそははべんめりつれ (源氏・蜻蛉)

これは、T位置において、モダリティとテンスが融合した変化であるとみられないだろうか。ところで、「つ」は「らむ」に上接する。大野はモダリティ助動詞に後接する「つ」と同様にみている。

- (45) などかはかく定かに思ひ知り給ひけることを今までは告げ給はざりつらむ (源氏・明石)

「らむ」が現在推量であって、テンス+モダリティの形式に相当することから、T位置における

テンス性が顕在化したとみられないだろうか。

大野（1977：11）は以下のように述べている。

- (46) 推量・想定と回想とは、ヨーロッパの文法では未来・過去というものである。しかし、日本人は時間（とき）について、延長のある、区分できるものとは一般に考えて来なかったらしい。日本人にとって未来とは主観的な推量・推定の中にあり、過去とは記憶に確かか、不確かかによってその存在の認識させられるものであったと思われる。

このことは、古代日本語では、テンスを表す助動詞とモダリティ助動詞とが融合していたことを意味する。つまり、統語構造的には、V-to-T 移動なしに T において併合されていたと分析される。

次に、否定辞と T 移動について考えてみよう。いわゆる「対偶中止法」は等位接続された二つの句をまとめて否定する語法である。

- (47) かげらふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし（徒然・七）

得られる解釈に基づけば、以下のような構造である。

- (48) [[[かげらふの夕を待ち], [夏の蟬の春秋を知ら]] ぬ]...

現代語で (48) の解釈が得られない理由は、三原の分析のように、V-to-T 移動で「知ら」+「ぬ」（否定辞「ず」の連体形）が併合されてしまうからであろう。すなわち、(47) は V-to-T 移動が起こらずに、「ぬ」が単独で T 位置でテンスと併合されていることになる。

古代日本語では、このように V-to-T 移動において必ずしも正であったとは言えない。すなわち、日本語においては V-to-T 移動において陰から正への変化が起きたことになる。

## 4 結 語

動詞移動に関するパラメータは、言語の共時的な多様性だけでなく、通時的な変化がどのようなものであったかを明らかにする。通時的な日本語の変化においても、同様な観点から見る時、興味深い現象があることを示せたと思われる。更に実証的なデータを蓄積していくことが今後の課題である。



注

- (1) Lee (1993) によれば, 朝鮮語では動詞移動が顕在的に観察される。

参考文献

- 大野晋「日本語の助動詞と助詞」1977 大野晋・柴田武(編)(1977)所収 pp 1-28。  
大野晋・柴田武(編)『岩波日本語講座7文法II』1977 岩波書店。  
三原健一『時制解釈と統語現象』くろしお出版 1992 pp 154-160。  
三原健一・平岩健『新日本語の統語構造ミニマリストプログラムとその応用』。1.3移動。pp 33-36  
2006 松柏社。  
Baker, M. *Atoms of Language*, Ch.2-3, 2001, Oxford University Press.  
Fisher, O., A. van Kemenaeu, W. Koopman, and W. van der Wurff *The Syntax of Early English*, Cambridge  
University Press, 2000, pp.106-108, pp.130-131.  
Lee, Jae Hong Postverbal Adverbs and Movement in Korean in *Japanese Korean Linguistics Vol.2*, CSLI.  
1993, pp.429-446.  
Roberts, Ian *Diachronic Syntax*, 1.3 The Verb-Movement Parameter, Oxford University Press, 2007,  
pp.40-64.